事例２　複数の場面を読むことを通して登場人物の心情を考察する

１　ねらい

新学習指導要領の「古典Ａ」の指導事項「（１）ア　古典などに表れた思想や感情を読み取り，人間，社会，自然などについて考察すること。」を指導の中心に取り上げる。「古典Ａ」の言語活動例の「ウ　図書館を利用して古典などを読み比べ，そこに描かれた人物，情景，心情などについて，感じたことや考えたことを文章にまとめたり話し合ったりすること。」を参考にして設定した、「複数の場面を読み比べ、そこに描かれた登場人物の心情を話し合う」という言語活動を通して、古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察するための言語能力を育成する。

この実践では、学んできた知識を生かせたと実感させることで、生徒が学ぶ楽しさを感じられるようにした。学んできた知識を生かせたという実感をもたせるため、授業では、既習作品（『大鏡』）の学習を通して得た知識や自らの文法知識などを意識させながら読解を進めていくようにした。

２　学習活動の概要

（１）単元名　『蜻蛉日記』－「うつろひたる菊」「泔坏の水」－

（２）単元の目標

①古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察しようとする。
（関心・意欲・態度）

②古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察する。
（読む能力）

③古典特有の表現を味わったり、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解したりする。
（知識・理解）

（３）取り入れる言語活動

複数の場面を読み比べ、そこに描かれた登場人物の心情を話し合う。

（４）単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
本文に表れた思想や感情を読み取り、作者や登場人物の心情について多角的な視点から考察しようとしている。	本文に表れた思想や感情を読み取り、作者や登場人物の心情について多角的な視点から考察している。	本文中の和歌を、現代の言葉に即して理解している。

（５）指導と評価の計画（全３次）

次	学習活動	指導上の留意点	単元の評価規準と評価方法
1	**●平安時代における貴族の結婚形態についての理解を深めるとともに、教科書掲載箇所までの作品の流れをつかむ** （1）平安時代の貴族の結婚形態について確認し、ﾜｰｸｼｰﾄ①（資料１）にまとめる。 （2）作者と藤原兼家について確認する。 （3）『蜻蛉日記』についての理解を深める。 （4）作者と兼家が結婚するまでの経緯を知る。	○国語便覧等も活用させる。 ○既習の歴史物語『大鏡』におけるｴﾋﾟｿｰﾄﾞから兼家の印象を挙げさせる。 ○作者と兼家の年齢等の確認のため、ﾌﾟﾘﾝﾄ（資料２）を配布し、記入させる。 ○便覧等を使用し、平安時代の女流日記文学としてのこの作品の文学的意義を考えさせる。 ○ﾌﾟﾘﾝﾄを配布し、兼家が積極的に求婚してきたことを意識させる。	
2	**●「うつろひたる菊」の本文を読解する** （1）音読・解釈をする。 （2）３首の和歌を、自分たちが日常的に使っている言葉で置き換え、ﾜｰｸｼｰﾄ②（資料３）にまとめる。（ｸﾞﾙｰﾌﾟ） （3）各ｸﾞﾙｰﾌﾟの和歌の解釈を読み合い、理解を深める。	○読解に必要な文法等を適宜確認しながら読ませる。 ○敬語がほとんどないため、主語の把握に留意させる。 ○散文の部分が和歌の詠まれる経緯を説明していることに気付かせる。 ○歌の詠み手の心情に留意させる。 ○ｸﾞﾙｰﾌﾟごとに発表させ、全体で確認させる。	**読む能力** 〔行動の観察〕 **知識・理解** 〔ﾜｰｸｼｰﾄ②の記述の確認〕
	●「泔坏の水」の本文を読解する （1）音読・解釈をする。	○解釈の留意点は「うつろひたる菊」と同じ。	**読む能力** 〔行動の観察〕
3	**●兼家の作者に対する気持ちを考える** （1）この単元で読んできた『蜻蛉日記』の複数の場面を通して、兼家の作者に対する気持ちをｸﾞﾙｰﾌﾟで考え、ﾜｰｸｼｰﾄ③（資料４）に記入する。	○本作品は女性の視点から書かれたものではあるが、夫である兼家の言い分も考えさせるようにする。兼家の気持ちを自分に引き寄せて考えさせる。	**関心・意欲・態度** 〔ﾜｰｸｼｰﾄ③の記述の分析〕

３　授業の様子

【第１次】平安時代における貴族の結婚形態についての理解を深めるとともに、教科書掲載箇所までの作品の流れをつかむ。

ここは１時間をかけて展開した。

本文を読んでいくための準備として、まず、生徒から、当時の貴族の結婚形態や既習作品である『大鏡』での藤原兼家のエピソードとして知っていることを挙げさせた。また、教科書掲載箇所までの作品の流れを把握させるために、『ビギナーズ・クラシックス　蜻蛉日記』（角川書店）を参考にして、兼家と作者が結婚するまでの経緯の場面を現代語訳した資料を作成し、配布して読ませた。

【第２次】「うつろひたる菊」「泔坏の水」の本文を読解する。

ここは約3.5時間をかけて展開した。

「作品世界に関して知っていること」として第１次に生徒から挙げられた事項も意識させながら本文を読み進めていく中で、登場人物の心情を考えさせた。また、散文の部分が和歌の詠まれる経緯の説明であることに気付かせるようにした。

和歌を自分たちが日常的に使っている言葉で置き換えるというグループ作業を入れたのは、和歌の内容を自分たちの実感としてとらえさせるためであった。しかし、生徒から提出されたワークシート②（資料３）を見ると、これはなかなか難しかったようである。「嘆きつつ～」の歌は小倉百人一首にも採られていて、生徒には馴染みがあったことが逆に解釈の自由度を狭めたのか、既成の解釈にとらわれる傾向があり、独創的な言葉遣いによる解釈は出てこなかった。授業後の生徒の感想でも、普段の言葉遣いで和歌を解釈するのは難しかったと書かれているものが見られた。作業がうまく進まないグループについては、第１次で使用した「作者と兼家が結婚するまでの経緯の場面を現代語訳した資料」を活用するよう指示したところ、それを参考にしながら自分たちなりの表現をしようと努めていた。グループでの話合いを通して、３首の歌に対する理解そのものは深まったと思われる。

次に挙げるのは、「うつろひたる菊」に出てくる３首の和歌を、各グループが自分たちの普段の言葉遣いで置き換えた例である。

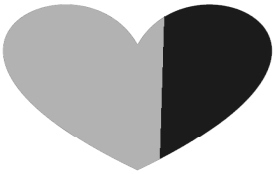
● うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならんとすらむ
- 他の女に渡すつもりの手紙を見ちゃったんだけれど、もう私のところにはきてくれないの。
- あやしいな、これ。他の女に手紙を送っちゃってるけど、まずいねえ。もう私の所に来てくれないのかな。
- あやしいな。浮気相手にあげる手紙を見ると、私のところに来なくなって私は捨てられるのね。

● 嘆きつつひとり寝る夜のあくる間はいかに久しきものとかは知る
- 悲しみながら、ひとりで寝る夜の間はどれほど長い間であるかと…。
- 私が兼家様の来ない夜をこんなに悲しんでひとりで朝になるまで待っているのに、どうしてあなたは分かってくれないの。早く帰ってきて。
- 悲しくてひとりで寝ている夜が明けていくまでの時間がどれだけ長いか知らないでしょうね。
- 兼家様がいなくて、すごく淋しくて、毎日が遅く感じることも、なんにも分かっていないのね。

● げにやげに冬の夜ならぬまきの戸を遅くあくるはわびしかりけり
- 本当に冬の夜は長くて寒くて、待っているのはとてもつらいよ。早く扉を開けてほしいな。
- 本当に、冬の夜は長いから外で待っているのはつらいけれど、あなたが戸を開けてくれないのも同じくらいにつらいんだよ。
- 冬の夜中みたいに長時間君の家の前で待っているのは本当につらいよ。

「うたがはし」の歌においては、作者が兼家の心中をどのように推し量っているのかを考えさせた。具体的には、兼家の心中を模式的にハートで示し、作者が、兼家の気持ちは自分と他の女（兼家が文を書いた女）のどちらにあると思っているのかを、色で塗り分けさせた。すると、生徒のほとんどが右の図①のように塗り分け、「兼家の心は、作者に対する気持ちより、他の女に対する気持ちの方が強まっている状態にある」と考えていた。そこで、図②と比較させ、なぜ自分が図②のように考えなかったのを生徒に説明させた。生徒からは「図②だと、作者は、兼家がすっかり心変わりしたと思っていることになる。この歌では、作者は、兼家が今現在心変わりしつつある状態だと思っている。」という答えが返ってきた。なぜそのように考えたのかをさらに聞くと、「助動詞『らむ』があるから。」という答えが返ってきた。そこで、助動詞「らむ」の働き（現在推量）について簡単に復習した。

図①　生徒の色分けの例



〔淡色→他の女への気持ち
濃色→作者への気持ち〕

図②　比較させた例

〔淡色（他の女への気持ち）のみになっている状態〕

また、「嘆きつつ」の歌では、ほぼすべてのグループが、前頁の囲みにあるように、「いかに久しきものとかは知る」の部分を「あなたは分かってくれないのね」と訳していたため、なぜ「かは」を反語で解釈したのかを説明させた。生徒からは、「ここの場面では、作者の心中としては兼家を咎める気持ちが強いため、反語の解釈の方が合うと思った。」という答えが返ってきた。そこで、反語の働きについても簡単に復習した。

和歌を自分たちが日常的に使っている言葉で置き換える場面では、このようなやりとりを通して「自分の解釈はこれまでに学習してきた文法知識に支えられているのだ」と気付かせることで、「学んできた知識は読むことに生かせるのだ」と生徒が実感できるように務めた。

【第３次】兼家の作者に対する気持ちを考える。

「兼家が作者をどのように思っていたか」について、グループで約0.5時間程度で話し合った。

話合いには生徒それぞれの価値観が表われており、興味深かった。「兼家が作者をどのように思っていたか」については、次のような意見が出された。

- 一夫多妻制だから兼家にとって作者は複数いる妻の中のひとりなので、作者が兼家を思っている程には考えていないのではないか。
- 何回も求婚したが、手に入れたことで作者に対しての愛情が冷めてしまった（飽きた）ように思った。
- 作者は和歌の才能があるが、嫉妬深く何かと疑ってくるから面倒だと思っている。
- 他の女のところへ行っても、結果的に作者のところを訪れていたので、言い合いをしても彼女のことを思っていたのではないか。

作者の立場を中心に置いて読解を進めていたとしたら、兼家を過度に非難するような見解も出てきたと思われるが、今回は単元の冒頭で、生徒から平安貴族の結婚形態や『大鏡』における兼家のエピソードとして自分が知っていることを挙げさせ、それらを意識させながら教科書掲載箇所までの場面、「うつろひたる菊」、「泔坏の水」という複数の場面を通して考えさせたことで、生徒は感情的にならず、多角的な視点を基に作品内容を理解することができた。「作者にとっては夫は一人だが、当時の貴族の男性、特に兼家のように権力を持った者からすると今回の行動は当然のものだ。」といった生徒の

発言も得られた。平安貴族の結婚形態や『大鏡』における兼家のエピソードなどに関する生徒の既習知識は、登場人物の心情について考察する際の視野を広げるのに有効であったと思われる。

グループでの話合いは、生徒が疑問点などを遠慮なく話し合う機会となり、受け身になりがちな雰囲気を改善することができた。自ら考える姿勢の重要性を再認識させられたのではないかと思われる。しかし、若干ではあるが、話合いに参加できず、聞き役に回っているだけの生徒もいた。例えば、グループ内での役割分担を工夫させるなどといった、全員を話合いに参加させる工夫の必要性も感じた。

【授業後の生徒の感想】

- 和歌が入る作品は心情がよく分かるので楽しく感じた。
- 古文ではあったが、どこか遠い話に感じず、現代に置き換えられると思った。
- 現代の女性は男性と対等になったが、この時代の女性は毎日、夫のことで心を悩ませてすごさなければならず、想像すると怖くなってくる。
- 自分だけの視点から、自分の都合のよいことしか書かない日記は怖いものだと思う。
- 作者はプライドの高い人物であったから、兼家が他の女性のところへ通うことを知り、辛くなってしまったのだろう。
- 後世にまで残る作品となったこの日記を書いた作者は、相当気が強かったと思う。
- 『蜻蛉日記』は読みやすく、内容の理解が容易であった。

「授業後の生徒の感想」からは、和歌が入った作品の学習に楽しさを感じた生徒（波線）や、作品世界を自分に引き付けて考えた生徒（二重波線）がいたことが分かる。

また、作品に対する評価（実線）を書いてきた生徒もいた。これは、作品を解釈する視野が既習知識によって広げられたことから引き出された気付きであると思われる。このような気付きは、古典のもつ価値への気付きにもつながり、そこから古典に対する興味・関心が生まれることも期待できる。

４　評価の例

読む能力の評価は、「うつろひたる菊」、「泔坏の水」を読み進めていく第２次に行った。文章を読解する学習場面において、文脈の流れをとらえた上で作者や登場人物の心情を考えられるかどうかを、生徒の発言や授業の様子を観察することで評価した。文脈の流れをとらえた上で作者や登場人物の心情を考えられている生徒を「おおむね満足できる」状況（Ｂ）とした。「努力を要する」状況（Ｃ）と判断した生徒には、他の生徒の意見を参考にさせながら前後の文脈から推測させたり、読解のポイントとなる文法事項等に気付かせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

知識・理解の評価は、主として第２次の「３首の和歌を自分たちが日常に使っている言葉で置き換える学習場面」を対象とし、授業後にワークシート②（資料３）の記述を確認することで評価した。自分たちの普段の言葉遣いで和歌の内容を表現できているものを「おおむね満足できる」状況（Ｂ）とした。ワークシート②記入例（資料３）は、自分たちの普段の言葉遣いで和歌の内容を表現できていることに加え、「ここやとだえにならんとすらむ」や「いかに久しきものとかは知る」の部分に、詠み手の心情を汲み取った説明を加えるという工夫をしていることから、事例実践校においては「おおむね満足できる」状況（Ｂ）の中でも優れたものであると判断し、「十分満足できる」状況（Ａ）と見なした。「努力を要する」状況（Ｃ）と判断した生徒には、第１次で使用した「作者と兼家が結婚するまでの経緯の場面を現代語訳した資料」を活用させたり、和歌中の表現を自分たちの普段の言葉遣いに置きかえるとどのようになるのかをグループで話し合わせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

関心・意欲・態度の評価は、主として第３次の授業後に、ワークシート③（資料４）の記述を分析

することで評価した。兼家の作者に対する気持ちを多角的な視点から考察しようとしているものを「おおむね満足できる」状況（B）とした。ワークシート③記入例（資料４）は「おおむね満足できる」状況（B）と見なすことのできる例である。「努力を要する」状況（C）と判断した生徒には、第１次で使った資料や本文を再度読みなおさせたり、他の生徒の意見を参考にさせたりするなどの手立てを、個に応じて行った。

５　成果と課題

（１）成果

本事例の成果としては、次のようなことが挙げられる。

ア　生徒がもっている既習の知識（古典作品の背景にある当時の文化や習慣に関する知識、既習作品に関する知識、文法に関する知識など）を文章の読みに生かす場を作ることができたこと

本実践では、本文の読解に入る前に、生徒から平安貴族の結婚形態や『大鏡』における兼家のエピソードについて自分が知っていること（学んできたこと）を挙げさせ、それらの事柄を意識させながら作品の読解を進めるようにした。また、和歌を扱う場面においては、自分の解釈がなぜそのようになったのかを教師とのやりとりを通して考えさせる中で、自身が学んできた文法知識を使わせるように仕向けた。

生徒がもっている既習の知識を文章の読みに生かす場を、授業の中に設けるようにすることで、生徒は「自分が学んできた知識が役に立った」という意識を強めていき、そこから、古典を学ぶ楽しさが生まれることが期待できる。

イ　話合いによる言語活動を通して学び合いができたこと

和歌の解釈は容易ではないが、グループで意見を出し合う中で、拙いながらも形を整えることができた。一人ではできないことも、グループで取り組むことで一つの形を作り出すことができ、学習に対する意欲の向上にもつながったと思われる。また、心情を話し合う場面でも、どのように言葉で表現するかをグループの中で意見交換することができた。生徒は学び合いの意義を感じていたようである。

（２）課題

課題としては、次のようなことが挙げられる。

ア　授業中の各作業や言語活動を行う目的を明確に生徒に示すこと

生徒の主体性を引き出し、自ら読むことを促すために、本実践では話し合う活動を取り入れた。しかし、話合いにおいては、まれに教師の意図しない解答が出てくる可能性もあり、その場合の対応を柔軟にしていかなければならない。生徒たちは古典読解のための知識も多くはないので、感覚的に考えてしまう傾向もある。授業中の各作業や言語活動が何を目的としているのかを、生徒に丁寧に示す必要がある。

イ　学ぶ意欲を高める工夫

読んで分かるということは生徒の学ぶ意欲を高める上で重要なポイントである。分からせる（理解させる）ためには、授業の展開を入念に計画することが大切である。生徒の学ぶ意欲を喚起するため、生徒の実態に応じた適切な指導の工夫の必要性を痛感した。

使用教科書　・『改訂版高等学校古典　古文編』第一学習社
参考文献　・『ビギナーズ・クラシックス　蜻蛉日記』角川書店

ワークシート①

資料１

蜻蛉日記　藤原道綱母

年　組　氏名

蜻蛉日記１

○平安時代の貴族の結婚形態について知っていることを書こう。

★平安時代の結婚形態で、夫婦関係をうまく築くにはどうしたら良いか。男女のそれぞれの立場から考えてみよう。

○『蜻蛉日記』の作者は藤原兼家と結婚している。兼家は既習の歴史物語『大鏡』に登場したが、どのようなエピソードがあったか。また、どのような印象が残っているか。

○『蜻蛉日記』について

★便覧等を使い、どのような作品かを知ろう。

・作者　…

・成立　…

・内容等…

ワークシート①　記入例

蜻蛉日記　藤原道綱母

年　組

蜻蛉日記１

○平安時代の貴族の結婚形態について知っていることを書こう。

・「顔を見る」ということ＝結婚

・一夫一妻制

★平安時代の結婚形態で、夫婦関係をうまく築くにはどうしたら良いか。男女のそれぞれの立場から考えてみよう。

和歌を頻繁に贈る。

夫婦妻になればいい。

○『蜻蛉日記』の作者は藤原兼家と結婚している。兼家は既習の歴史物語『大鏡』に登場したが、どのようなエピソードがあったか。また、どのような印象が残っているか。

兄弟の仲が悪い。

○『蜻蛉日記』について

★便覧等を使い、どのような作品かを知ろう。

・作者　…藤原道綱母

・成立　…九七四年頃

・内容等…最初の女流日記文学

九五四～九七四年の二十一年間についての記述

プリント

資料２

○『蜻蛉日記』の作者と兼家について

蜻蛉日記２

西暦（年号）	作者年齢	兼家年齢	出来事
九五四（天暦八）	十九	二六	初夏、兼家が作者に求婚 秋、作者と兼家結婚
九五五（天暦九）	二十		八月下旬、作者が道綱を出産 九月、兼家が町の小路の女に宛てた手紙を、作者が発見 十月下旬、兼家三晩来ず
九五七（天徳元）	二二		夏、町の小路の女、男子出産
〈略〉			
九六六（康保三）	三一		三月、兼家、作者邸で発病。後日、作者見舞いに兼家邸へ 八月、兼家とのいさかい
〈略〉			
九七四（天延二）	三九		一月、去年の八月以来、兼家の訪れなしの記述
『蜻蛉日記』以降			
九七八（天元元）			十月、兼家、右大臣に昇進
九八六（寛和二）			六月、兼家、摂政となる
九八九（永祚元）			一二月、兼家、太政大臣となる
九九〇（正暦元）			兼家、関白となる 七月　兼家　没
九九五（長徳元）			作者　没

ワークシート②

資料３

年　組　氏名

蜻蛉日記３

本文中の和歌を読む

※和歌の解釈（口語訳）を、皆さんの日常の言葉遣いを用いて書いてみよう。

○うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならんとすらむ

〈解釈〉

○嘆きつつひとり寝る夜のあくる間はいかに久しきものとかは知る

〈解釈〉

★この歌を受け取った兼家の気持ちを想像してみよう。

［……そして、実際の返事は次の歌。］

○げにやげに冬の夜ならぬまきの戸を遅くあくるはわびしかりけり

〈解釈〉

ワークシート②　記入例

年　組　氏名

蜻蛉日記３

本文中の和歌を読む

※和歌の解釈（口語訳）を、皆さんの日常の言葉遣いを用いて書いてみよう。

○うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならんとすらむ

〈解釈〉

あやしいな。浮気相手にあげる手紙を見ると、私のところに来なくなり、（私は）捨てられるんだろうな。

○嘆きつつひとり寝る夜のあくる間はいかに久しきものとかは知る

〈解釈〉

私が兼家さんの来ない夜とこんなに悲しんで一人で朝になるまで、待っているのにどうして兼家さんは、なかなか来ないの？早く帰って来て！

★この歌を受け取った兼家の気持ちを想像してみよう。

［……そして、実際の返事は次の歌。］

○げにやげに冬の夜ならぬまきの戸を遅くあくるはわびしかりけり

〈解釈〉

本当に、冬の夜は長いから外で待つのはつらいけど、あなたが戸を開けてくれないのも、同じくらいにつらいんだよ。

ワークシート③

資料４

年　組　氏名

○兼家は作者のことを、どのように思っていたでしょう。自分が兼家だったらと想像して、理由も含めて書いてみよう。

○『蜻蛉日記』の学習を通しての感想を書いてください。
良かったこと、気づいたことなどを自由に書いてください。

ワークシート③　記入例

年　組　氏名

蜻蛉日記４

○兼家は作者のことを、どのように思っていたでしょう。自分が兼家だったらと想像して、理由も含めて書いてみよう。

作者は本妻でなかったから、そこまで作者を想っていたとは思わない。
兼家は権力もあったから、たくさんの女性に好かれていたはずだから、その中で気に入った程度の女性だったと思う。

○『蜻蛉日記』の学習を通しての感想を書いてください。
良かったこと、気づいたことなどを自由に書いてください。

・和歌が途中に入る作品は、心情がよくわかるので楽しく感じた。
・登場人物が少ないから読みやすかった。